215
内閣文庫
和書
類 二七九一八
號
冊 二〇
架 一九八
函 九〇

和
二
二〇冊
六架

内閣文庫
番號 和 27918
冊數 20 ( 1 )
函號 199 215

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

謡頭大夫

祢りひそ三の山嵐やくる事の宮
居よまふらん　抑是ハ當今小仕
まつりたる下也　備ともうら明神ハ
氏の神にて御座ある。君よりの賜
中。峰今稲荷の社よ参詣仕は
ねる立や月も都の旅のそらゆく。



明治十三年購求

かもの橋をとめぐりて実西向きて
かみの溝鴨川打渡り浪の音
ゆふけてまし田中の社とかや稲
荷よしやくさつよかりく詞まて見
是なりや稲荷の社よまいりてしばん
都よ来稲荷是よりもとつよまいり
立そろりて山也 松有るゝくおもや嵐よ

御溝乃名をとめつ流れ行かくみや
あめつち神垣や天柴代まで老の
身よ我此山よ地をさめて月乃
光もくもの実治まる八将の君
もゆきかよ民さう都安全とか
ふく身乃ぞこまゆみ乃数くよ
早振神や西方もの御代な

らし露けき女麁く田の面乃穂
なみ道くだる付旅のかりみれや
けよる雉子君か代々むかしの道
まかすひかえめくみよふしのあや
らむし我山よりよりあて
あらわりうる参る結中ところよ
老人夫婦来りて是成る升のか

とさしくて偈仰乃氣色見えたり
袍し宮はことして御へは久さん宮
はこまて御掛さまくく八都よりの
此御結まて御庭かの寒よくの
詠しておぼ是八都よりもしめて御結
中て此当社まとめて御神秘く
りく御物語は三へ柿當社より

ハ弘法大師入唐の時明神にあひた
まひ給ひくハ我朝の佛法王法
此寺の擁護神と成て王城を守り
給へと約しく深く契約ありけれハ。
扨て紀伊乃岩田と申所に
影向ありてそれより都東寺
へ移り給ふ大師もおなしく嵯峨

の天皇へ奏せられけれハ當山を
とらせよの勅定をうけ此山に
宮造らし給ひて。王城を守り給
ふ也されハ此鳥井の額を大師に
作らせ給ひて筆を深くおされし
給ひけるとや是ハそれをさけりて西
白や備ハ大師乃清き跡とぞ承る

又たゞし神無也よあかり三の段よ
いかゞ明り謂乃あるやらん三乃段に
を三天と安置し同じく如意寶
珠とうつまれさせまして宝珠と
志くまうんゝ延暦初年に
継體乃指授此山へ影向ありて
末緒のうちよ信心乃深きよ

かくは伎ら珠とあまへ給也又義氏
三の段よはあそびしありがたき
明神乃清瑠璃寿これら延義の
む人の影ひとてしもとてぞ長番よ
あゝ三代とよし火人ば坂おとよあやみ
とうよ人ハ無明乃やみ忽よ晴つ
色しほくやうあるさうや。

界とし妙なる寶珠なれば末世に
思へば今もなほ道ある御代
にまゐりあひとてそのかみさ
まざまにおそれや君が代の。
うき御代もとゞまりけりとぞなると
ても都人昔にもかはらぬなるか。
神のまんとくそなへまさぐ榊

当社と申は和銅よりも此山に
地をしめ弘仁七年子四月乃比新
向ゐるは山神竜頭太夫新
とうけ給はりあやしくも神輿と
うつしあらため時大師大唐
よりもたらせ給ふ仏舎利を
竜頭太夫よろこび色にも歓喜な

かめたしちわきんど末社を数て
ちる護し給ふ旭日さし夕日かゞや
く稲荷山志ろの秋も年ふりて
三の玉垣神さびて仰もとめ給
なれや。あらしや颯も落る紅葉を
深草の野辺の時雨も夕の風や
をゆくて柳葉なるも淀の渡さ

あらし紀の糸くりかへしも面白やされ
ども此神は大慈大悲の化現な
れば三世利益志給ひ衆生済度
あらはして今此山に住給ふ我て
よ我とも三世の物なりしばかりすと
ても気やこちまでも御まり給
ふを拝せしよ。神文化も嘆しく信ひ

深くなりし二世の契ひとつな
へんと誓約ふそれなりしとき　あな
ありさき沖神貌ぞくは付てさ
かはしや此名をおもりそまへや
何とて今ハつゝしむへきぞ我此山ま年
経しかば頭大丈夫我なり　さてさ
きゝえて竜頭の和光の姿あらは
て君安全といふ千代のまもり
ありぬあらはのゝひとすし都の
みけさのむぐらもあ月ハ久坐晩
きよきり衆とまふ神とられて其
まくわしく標是ハ唐雲飛の
し通力自在をゆるさずけいれ
ちの神なりさてそ当山宮ハ法

ちんぜいより勧請し給ひし聖廟の
守護神となりし大師を佛法秘
密さゐしんの霊地也さるによつてそ
鳴井乃額も大師の御筆なれ
みわれなバ只今あらはまち立
其時法殿のとひしとひし炎く
本地大聖不動明王の化現とあ

らたし利剱とひけさけ出あひ給
色え又鳴神ハ額とともにし。
わうんとするを鳴神立ちまち鳴神
と大地よりふるせ額ともに七。
さりくの縄にていかめらる是ハ
鳴神ハたちまちみハせんふりくらく今
より後ハ此山よ来らまじと感激と為

やうまで鬼神に横道なしとて
さゝし酒を長杯とおして本だ
鬼どもも雲霧となってのがりゆけ
も額ともとりかよりけ酒ひ神も
社壇に入給ふか御寄特のあらさ
なりける神恵の程こそまこと難有れ

空腹

作（呈ゞモリ討）是ハ判官殿の御内に仕へ申た
伊勢の三郎義盛にて候扨も頼朝
義経御中不和に御なりまするにより。
我君義経ハ都に御是をと定めた
まつて弁慶をそのみ御舟処ば
又衆徒のせんき督今夜ようらと

其支一定の忠とや申へし扨よ此忠ハ我
君へ申上さやと存候ハ不申上候義
盛か參りてハ判官殿へ參りハへ
畏てハ　判　唯今ハ何の為に來りて
候ぞ　ミ　さん候唯今人の申候ハ畜
此者共ハ何かハ仕今夜ようち
と討へきと申す一定の忠申ハ乃此忠

申上む為に只今參りてハ　判　是ハ
此おとにてきくだに口惜や我いそいそく
乃ちんとおふれいたいされなせ候か
てさてきよめいとおもハさん為也
此山の雜兵のよにかうへきと告
ちゝもろ參併天のけりこそわさに
今くま我ハ殿に入此山とひし／＼庵

志さうしかけりしがなせき矢一ついて懸
して落し度候代まて乃君をそく
ちたりしかれば誰か一人残りながらせ剣
こそ候令下と全きて路次まて追付
へきとおれやあるが義盛とゆひし人へ
御詮長てうけきはさりしさるを
あるべき残木とゞまりぬる何事まてと

きけ伏さしそ候てへまいそれは一会
らずまじ申防矢仕り路次まて
追付申は伏申さん夏其身武器
用意りもなくて一大事とこそ
存候へそれば恐ながら誰しても候
め出さまじて直よ仰付られ候へ
としこ候は　判　抑ハ義経の思ふ所也

佐藤忠信とめして参り候へ長て
候ひつる此座の内に忠信の御入候
我なりそ御入候そ君よりの御
使に参りて候ぞ急き参りあれとの
御定にて候長て候忠信参ると
て候いふに忠信扱も当山の者
共只今夜某討とうつ事

一定の様に申候我ハ衆に入此山と
ひらくへしさらはやかて防矢ひし
ひしと射るを射ると云て防き夏館に口惜
う候へとも只一人とまり防矢射其
後命とまりよ去て路次まて追
付候へ御諚長て承候去なりと其
ク事ハいりく返しもめしくせへし候

て余人よ仰付られ候へば若辞しや
者あらば其時ハ汝ぞ筵ととられむきや
ましく候　判　いや義経公とそのむかし
へいとくのまハ入ましまし候　詞　長
て候御筵とともいそてそむく色が
あらバ一人又まれや防矢仕れと
力は筵弓矢とりての面目なれ

承そうけ候去ながら御そのあハい
くさのなかしひや我奥州と出し時よ
りましはひつせそもし一命と此時や
初しかんばまへもしも我君と契
てまつりし人くよ此名残をおし
うらへとて　地　あくのみ波としさへて
此前と立路おくれまれおはなる

かくて時刻もうつるとて、しばし我君
ともなひたてまつり、門前を出て御
道すがらもひそかに思ひ出す夜半へと
忠信をし八御供し　御いとま申
とゞまれどもかくまひて命をとまらし
ての供よりあらしともちうへ
心得よと渡とおきせ給ひてかし

あしと忠信ハ只ひとりとゞまりひのさ
そ便をなすみさうらんく吉野
川水乃俄まくさまし先までゞ頭う
ちよ千すおもしりわ大お武動ん山へひ
流しと志川まわりてゞぜんえまもこ
ともとらけをとうすて山走むきる
へう山大いつま此坊中へ案内申山

詞 悔しさや今ハ我を又人をおもはれし
景門とハいかなる者ぞ 大 さん候それ忠
信ある者にして此谷御仕断あるまじ
くは 公ゆゝしけれ 大 景門ゆきさん
とこそ 詞 景門とは如何なる者ぞ
大 我なくも頼朝乃御にも左ぞ
ひゞ當山のもれとも判官なれば

逆に参りたりとも御出合に
詞 何我君の御逆とや 大 中くの
事 詞 おそれ多くしや番すくも
我君に思ひかゝらんとやぼしまろ
軍の試に 此矢一筋うけてみよ
と言るやくまさしてもあかくぐ中
されて折ふしひあつてまる

清矢におまりさへ次けそろ武者に
人々ひとやまをとところへ目でお
とろしぎにと言して大勢ハたし
川と引てハよまりとそ於紋
若者も刀とのまれてでで
まりにておよりかてかにあへ交
字は切とそ見をしてそし腹切

て徐々にいわしろの谷まてそこく
ひみくさしにいめの矢先とみて、く
まれや者共須とよれすて一度はたし
つきまりやふり乱入おめきさめ
ひも震動をして其陣に悪
信ハくらさて勇意の小太刀を
清元ひそくは悉ひ出いたらし

まちかつくらまり上はらひもおお
やしなひ者なくてあまハいつまよよ
そハりかくれて。地にふしかくれなくら
きとそとりまこのきんさもろえ。
みちもおしとそそしてまかりて
ごろふき思ひしうまりうらう
まそて二りよみれはちくく兵太刀
さしかけつつ太刀とうけあわし。
そろひさうけてさらさもちと
とりて今ハかうよとそ修羅の
谷と乳鳥あんとのおとくよくおち
天乳多ぞんをかおとくまくおりて我
下
たい
とさてそいそうか ハル おり

高安

次第
紅葉と分る錦田もえくする安の
里とそ川孫む　ワキ詞 是ハ都うくもの也
そろ者ニそて候我未甚日立田よ参り
もひ殺よ此度思ひ立甚日立田よ
参りそまて河内路とへて都ハ
のかへりをやと思ひ候　上歌 立田路乃末の

山越雲霧乃つゞく嵐にたちかへし
鳴鹿の声もかくさぬ稲葉に
見えし高安此星と申すもやくつたに
多かく思へおもむき旅人いかにく
よも来り給ひて候そ是は都の
者にて候去日立田に参り只今此所
に来りて候扨爰をばいづくと申候そ

さん候此所をば高安の里と申候
此所にとめて笛吹の松といふ里
と申候そおもしろくして笛吹の
松にて候扨何の謂れにて笛吹の
松とは申候そ此昔在原の業平
通ひ路よりひそかに立田とよみ高安乃松陰にて笛
を吹き給ひしによりて笛

あれなる松とは申ならはして候（ワキ）扨
ハいかに業平の笛吹そめしひそ
れ本乃おはしまさや業平ハ石よ
り立田越よ此所よりかよひしよ
なり（シテ）さればこそよりひくのた
なれ共有常が娘乃ありまし余所
まじ人や白波の（ワキ）盗人のある山路

されは先来なすさまよりかせふけは沖
津白浪立田山（ワキ）夜半にや君が独
こゆらんと（シテ）其歌よみし業平の（ワキ）かれ
なされし（上）高安の女も名をやさ
たる山夜中よまきれしてねさを
人めかそいやせんさ思ひ（ワキ）それを
なまよそて。奥津波とよみしあわ

それ白波とハ海賊の事とい
へ共かくいそくも山賊をも只同し名そ
と白浪の名を寄てよみしなかく
扨ハ瀬より業平ハおの松陰よりそふ
えと吹なひてはよるよふ中くの
事今爰ハ此松の下伏て若苗
の表乃字ゆるわりしと讀て比鏡

はへ是ハ物しき物事とかやは去な
りし今爰ハ家より松ノ孫乃枝の
事を語らくて其時ハしもあて
昔を語まうせん　ぞりや昔を語
らんとハ抑いにし男ハいかなる人そあ
ちらしや雅そとハ肯し夕人氣まふ
ま乃世よかく昔も今もかハらしな

あら妾の女とハ昔もいかなれ今とても
此里に住みなれてあら妾の女郎花
かくても住み果てて人に悔まれ
然ハ久り人数よりまさりし身にかゝり
あら妾の此松陰に仮寝してかゝる
しの跡と白露の苔の道とらし
まして又孫の髪も結ふやくあめ

らまし事の浮き節ひやうな名計りはある
妾のおもひけるはいつしか妾独りの甚だ名
も高や恋衣の袖しみの身まで明
昔しを秋ハ今よりぞ思ふ妾なれ
志よ那を出るや梅きやうなる松の
響きさえ渡りけると見えしハ人
紀乃なごりなり小見えし跡ハいかなる

人こそ思ひそめしそれ　汐弔ひの有
りさまはおそろしやもとの女と名にしお
ふ、そら幽霊にて出し也　悔しきや恨ハ
津昔の其名も妄乃女姿などと払ハ
家にありて　閻浮の昔乃故郷に
還りきたり　君をおもひし人
恋しん行方もしらぐ雲なるらしそ

なハうら枯の秋は嵐も揺の
声もかる古乃里なるに夢なし覚
然る古寒や烯にきて金吏るき
松陰や覚も一樹乃縁なりんく
蔓や命にハ志らう昔もそうりもあり
みぬ世語乃言の葉乃露かおとし
人やよる名にまたみも昔男乃跡

とめて此寺の里人乃宿の折
端の花落かゝ乃咲しそめし笛竹の
其名をとめて今迄もなき世語り
里人ならしや元ありし昔の有明
月乃よふかきぞとせさへ在
原の業平のいもせは紀の有常
が娘也我らもまりまきをたりし
と男おやなき思ひ添のびし添乃烟の
立やそれもりや忘れめ月のひさげ
乃ふれもあら思ひそくゆるう
み火のおもひけつ根の限とされ
つまたへ寿去孫よ知りしおも信の
色見てそよ所の二道ひと方に
津ろふまえをたえりしと　稀く通ひ

てそうやもとの有栖と今ハ成し
女心かしく織くも飯貝えて様く
の世乃つきさと織乃女かめくて糸麻
衣れ面にも似ぬ人心ざしそ思ひ捨
志す身の絲らむ色乃たがやどしまや
思ひ乏れん　玄須よ歌え人かな門
まつて松風もめかれしてハ能見

音のさかゆかるや楽よやかぬ
らむ　笛竹の夜声をとめる月
影よ雲乃袖とや返さん　葬わくろ
松も名よおもふる安の　花園山え
雪を廻てもと袖乃よそかひ　くあ
葬あるの　ふむ雨　実を妙成や
く秋遊乃わうう松風ハさいく村

夜はろくさ迄の夜遊の曙の
多ゞもなりぬ鐘をいふ嵐をさそひ
く松の枕の夢はさめてある女ぬ
風ばかりや残るらん

# 戀重荷

ワキ抑是ハ白川の院に仕へたてまつる臣下也
扨も我君菊の事を御もてなし中
にもとり分菊を御寵愛ましまして御庭
にぞ去頃より毎年菊をそへられ
候。又爰に山科のせうしとてや
しなき者の候が此菊の下葉をとる

せうじは菊年八来をといふ申付
さやうに存候父承いへば者いかゞ折
ふし女御の御姿を見まゐらせ
沈みなる恋と成たる由承及候
者を召し出し語らひやと存候へども
雖ある山科のせうじとまで申
いへ（シテ）いかにせうじ何とて此者に御座

さてきこしめ及候（シテ）さむらひは外面
労仕候て桜まもといふ（ワキ）げにや年
急ぎまし候といふ所より（シテ）桜堂
さて雖御耳に入ていそて（ワキ）いや／＼
さやうに出て思そそよ左男此
事とも君ゆゑ召及まで参い候
と捨て御座と百度千度まゐる

なりせば其刃はおのかれさせ給ふべき
との御事也さんげの有難き御
徳にてまします シテ 何と此悪の事と字
君は道此荷を持て百度を百度の袋
と八百ともをとを持てめでたく其
者よおのかれさせ給ふへきといや
アト 実よく仏法てまします かんはうを
躬の事にてはなまかりさいは其 シテ
荷を見なさい アト 此荷は某が
そまの字を荷よだんはうにて
声の荷にてまします シテ 扨よく是
ハかゝりける荷にて仏縁の有ぬ
藝よりも芸能なきところそ有べ
されはましてや是くハいやしきのとき。

さのみハへだてしなどゝやすかた重
荷成共われ迄のくさのゆかり
ままれ成よ誰かみそめて恋
れ道ちぎりまさりし人のおもはくん
わかれとなりや恋の重荷
あまたあるが此荷物それまでと
よひしきハゐるゝ思ひの深き

ハさこそみちのおもしいたまきもつて
それもとうりんや言まんまへうらき身
れ芸の身世はたえへてしあやね
と思ふ卦思ひやすとしなくさむしざく。
露のうちもとゞ夕日のかそくれ時も
そや色めく恋の重荷ハとりやらん
おかしとてものおもひハ捨しかゝ虎とお

もんたんなまくらに立兵のすゑこれはし
いまをもうつくしきよ 地 ふかいや
荷さへかたしふかうんひそ君に大
めとむすらおもく共にむそへてまてや
くきも人よ 下 しらしもかく此身八つ
あしいとけなき悪のやつことなりて
てふ行きの世をかりとうし 地 なにゆゑ

世よかれとそよしかやなみおもふ命は
そむきの志をたもちかねし立や
地 よしなき悪とはおもひしらずて入
も共にむらむとしてそくらしや独孫の
我もわかのくさかへてぞそ共にまよふれ
ぬそも悪は何のゆゑまよふそ 哀
てふ是もまたく八何とさそ是ぞみ人

されカ流ねてもさしそてのよ

あゝや悪しきむくそそもそ人

んなみてば悪によりて思ひきつ逢

にしさん何とせうしもあらし成

そうしやうが言語道断の事が近所ふ

ひん敷事ふてひそやそうして悪

此れもよのおとしば役者の悪なむ

しやかさの御方便して此其ゆへバ

さして悪といふ事ハなをさきいやしき

まよひの事して此身重荷をつ

つてどもをもう罪をさひきつうとして

うれくしもつみて持せびうかさま

てうろけ物つ荷なれ共此悪の叶

ま参人なよもこまなそと仏坊て。

しの御やどゝ申すもとの法華よ
ては殺はやきゝ着れ出しさぞさ
まみ事を歎きてかやうに月を
失ひはまみなしともうらめんよそは
へおかうしとそとやようしとめ
ましてはいふかしはは山科なせう
志童荷と持つ○そ法座まで

むすしく成てはやうれいやしきう
の一念はおそろしく行くるし
うはへきそと出あけてかの者
乃姿と一月待請んせられはへ悪
よ悪我中々まかもとなる悪は
八人の志かあまのうかむさんの者共
むやな [illegible] 是八鎖よかくしけなたるれ

捉もそばちやくそくせしおりませ
いやそれむしさしもとしはんたやくよ
ともまてぞ変よ立へきやうはしひ
くひハ常の世のあるしハしの野
川にいたさわよ御行のみちのきまよ
ハそそし悲ぶかし一念無量乃
鬼ともなりもえそよしかなやあまま

ことなきいとまとせれはそのまその
め給もわれもよしなき流れ我身の三
世の契りのみちてならいまれとてもさす
と云よ我ハよしなきやあひたき殺のも
まもゆしものあわれしわや給葛乃
のもいすさくねひれのあさきたおも
まかりれはてれとおもまさ云て思ひ也
浅香

の煙おさまりしのまやに立西う地獄よ
まきくろ立ひ板にか紙合やきか紙へ思る
此畑の立別擶菓乃所吹乱座にのや
みよ道て気えしく其振八看り雪り霞ら
は升よ八紙も治めへしや起し送れ婦
小松乃葉守の形と成て子代乃け
と申しん

羊

羊肉
標是ハ唐字にやうまの御門よ
仕へ奉りし臣下也板を此君へん
ゆうしにまし肉をわまかべ用捨を
あまくさまと民をさしをく御代
まそ候君て此者此君畜類に候
すなりに中にも秘範乃ほり羊のい

ひしとびかり若のみてはやらん
くれはよ失てハ我君の御縁よハ府
くふ高札を立ば此半乃まとの奏
はあり若あしてぐんうへはうよ
まへしとの御縁まてはる此由あ
付せやとあは祈よ梅りも花鳥
めぐ古梟よいさやうてもや

うたは若ハげいやう國のならはし
よがうたやうさあり若のみ子にあり
きくさあり若まては我他国の王よ
仕はうべ父母よ対せまてはる此
度御勝とあり唯今御座仕候
此歌ハ八雲の余所めよ讃来てぐ
山まうて通ふり古里乃跡をうへくとも

行よ行ゝ雪乃跡踏まれやまかさ
近き在所のたや坂おまれあれ
思ひれく何く御門の内羊と盗
まちる者と奏せる者あはしくく
むかうへこふよりへしさうかある
ふ第やぶの成者九恐ていやうん
先我家に帰りてやしなとひまいふ

此屋の門に立やうれ此方座候か
あうそくう申いうていシテ何ぞうも
くとやうあらめりしやべく宿
かくいは行よたつうた心をとなく思
案内よ唯今の申出姫うしれいへ
先出あくへシテ事つもいへ子かやうまいへ
参事此はシテ何事にてはそ子我

又他國の王に仕へ申せど其君婦
命をそむき何としてか心つきけれて武
あまさへ来りけるはへびそうか諸て守
せ申けるもとかくまでは面目もなき
先申度まては かの浮門乃羊を盗
尤様の物とをんくじば君命をそむき
をかりては 何と羊を盗みたる

われはや 音をたては いやいやうたこ
わかるこそ あまさば月命とわかるとも
はう肝要にては おことさやうに
申しはしひと申けるやもくは文
申色まり更乃は 何事にては
そ浮勝と鎮めおかるも近き矣
佛へ参籠申度存は 哉を安く

來り勝とハ思ひよらずは作ハ
玄宗にてはへ共我他国の王に仕
へしはよそもし大臣にてはゐるまじ
てハ叶はぬ 実や親子星とも共
子と云とも子ハありてよせとふ
まじ共親をハおなすまじと今
そ思ひきれまじと立るまじきハさ

汁とてまいらせ我らの香ぎもこ
とかなかり 力およばずしゝくと
て又ハ勝とあまへり我子が出て
め跡とて添ふまよ見送て泣
そくそと袖ゆけるく 言語道
断ぱ事という成者の親ではや
むと存る所に我か父の教ひ

てい夏の其念さハい急度為出し
そろまうかい札と引奉やナ申さて
やさなていよ奉やナ申しへきこまれ
い奉やナ申さんとへいう姉者まて
あらそ浄羊のまゝのい祈ま札
と引条内申してい极いうやうゆる
着のあそしいそし此出乃うこう

よおう出やうとか着乃丈婦さ
うれてい浄門の作よ度羊れ
さうと奉やナ申さそる着とそへハ
まんてんよもへとをくんおうハ
おうによるへしとまサぜんうく
添りいへ言語乃断ぜ羊とあさみ
そろ着ハいい某ののうさうしいおう志

やうとや民の夫婦なとうれかさる
ともしは御門の御使よりぞ出てく
ほまをおもく作り枕とみせおう
ちよひらせちやうくりんかんにを
にそそく恭門中せとのまでしは
乃其分に始は〈ゆりくもしひ
多くの老の月の川まとあらか

今なる羊のあゆみ近付とも
身の上と思へぞなすぞなきと
へともれやうのく月よや雲の春
あらんたち名とい〈と晴やらぬ
月よや雲のたほらん小老
今何とて車は重きぞさんけり
あるはさる車にて彼檀の物をそくは

詞
何としらぬ車ぢやまで。いとそれこそやう
三重
さん猶 官位 何とてしらぬ花羊とはいうな
てあるぞ汝もよく/\きゝ分て少々
へ汝が夫婦が不孝故に禁中の事はやし
に及ぶとも百民迄悩とかくる事ぢや。汝が盗人
故ぞうし。おかしき事は中々に及ぶとも娩が
くせ者まで見るぞ其て。うしいへ（ひけ）

ととそ
三重
浅ましの果報やちよ老隠
とれしみ老衰の涙とよう世はおか
き事ぞ思ひきてよ 下 今の我に有
様と物よ継とそのまゝぞえん
そんなきくりうよきめくしげぞ胡
忠よよく人まてんてうともひしい
中
ゐへもうくやと思ひきてまきそう

今はそれ此身とうしと思へ共ちくさに
なりたる小車の飛たよきと秋の哀
歩まぬ共車にはたれしき露の身の命
ハ限りあるなりしつみぬや海竹かうん
くいかに小督は勅定なさ
くさまて車をわたく作り焼と
乗せられちよまつりせたちゃう官人

とは立て泰山にはたうさんとハ
此丈婦ありてあとうさんは根而
家後りしそは此世よ思ひ更
あともやは〜さんは此世よ思ひ
くしてハなくは去あるも子と
一人持てはい仏諭とやしてはうじ着
と一月ほん度まわたわちもハなくは

（ヲ字）やくさやうにのひくが夏ハ旅
男成ば（ウバ）いかまゝしば我ホの科を
あらはしそろぞそれがし一月日の成ば
（ヲ字）いかまで上ば、うちそれがちよのば日ごろ
夫婦の科をあらはしそろぞそれがし
が一月日の成也申ば（ヲ字）何と申それ
訴人の人成と申候ぞ。それハ安事

まてば此あまりにくハうらみんで人と
申所に至てば。立越成て人（詞）最
てば言語道断訴人と成行が着そ
と成てばへてぞ我子のあらうらくに
てばハいかばぼ着ハ何と思ひば我夫
婦の科を殊してばそなたへら。
姥よハ深くうくさそやと成ばい

かふ焼訴人へとらかへてハ、越度い
か成者よしてハそ、其身よして罪
中とゆし老眼の事かれせしさら
よ見分もそハ、説様よハへしみら
うら立銭見へうもらしてハ、式様
の前へ女ハりぬ物よそてハ、術と信
ハ共見へいそハ叶ハまじ、あるんてく

やみ得なるよ、式へく法事ハ
か訴人とらり見へそハ、芳苦者そ
と思ひてハへで、弟子乃ちうく
よそハ、贈業をもうそくとは
見そハへ共、弟子といたし、若同罪
にや成るかと思ひ、極しそつみ
てハへ、おらゆきや何と思ひ我

本料と記して候ぞ所は情なき者よ
て候ぞ立越恨とやさしやと思ひしに
あれ就は我子のあうもくして今先が
汝は何と思ひて我が科と記して候
そなたより先の身れみころと前
見昔思ひ失なさんとれくみはおうし
なそくよろすりしをもなそ

らへをしてだらんへとの
身返を恥辱まそハひとしもや
今更がわ老が月の恨てひき
なけも共おんれもいやうくやままよ
とう返父は仕へ胡思のくへ是
ハ母と孫そぐうう流しきめし
をまどそれ猿しそならめな

と父母と。失なりんとたんそくせらん
子まよそふみをかくまうし。親も命
のつきなきと人よ久ゆかしも恥や
凡父母乃恩徳と知る事人君よ
かきろのみなすもとぎろしハ猶く
らよ悔りても。親の宿もる枝を
たそれいふやうハひき回りみそ乱

ふさとのむしとや鳥類畜類よも
追。殺ろれおそもあるそし。況人情
と情ありなりとさよろきんある
ろうんと恨ありしも仍もろ今。命
をかきろ父母乃名残を思ひ子兄
別をるを追かりけり　いろよ光命室
旅してあくそそ　公淨かてい我

念仏申へ シテ ハ 猶我ちからもなくて沿
申へ ワキ 沙弥ハ此者をちからしも
修のそみをうちへ申けきれ
てはシテ 子 あらきと云ハよれ御まあらず
老人夫婦か命をたまけて経へ
ワキ 老人夫婦をそそけよとハ名残
うきうひ事かな ハ とろゝやまき

あらず我親と子として思ひぬ立
やうこ ワキ 梅ハ沙弥力父母ヵ 子 あらう
ていか親のあうあやうせ ワキ 如し
あやぬさしき我親の科と子さ
あて形しけれ 子 此事余所
よそとされなしかく。祖か命を
きさしくへきハ菓科と形して歎

の令とゝもにすけやさんみのあ
使せ　おもきを犯の而事やあやう
きやうのおもハころしてそすく
是より祇乃而らしかれ公ん
きんのおもハ拜すまとの我う
人さいふは君の為　命とおもハ
親乃為　君と親とは　忠ふう

れ　仏まくおもふまくと君を
哀も　あしるに親乃命とそまけ
よもの宣旨を承るれしさや身
まわりまかうん。めりの目出度式君の。
恵わきの　きみ公の直なみの御
代久よ御親とあかく我ま逆。豊ま
とめつられ御よく

此百番者世上流布之板行二
百番之外之百番也章句等
悉下當流遂吟味令板行者也

御書物師
林和泉掾

貞享三年丙寅九月下旬

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan